

他者化から共感へ ——釜ヶ崎のまちスタディ・ツアーを事例として——

From Othering to Same-d:
A Case Study of Kamagasaki Study Tour in Osaka

須永 和博*

要 旨

本論文は、日本最大の寄せ場として知られる大阪・釜ヶ崎で行われている「釜ヶ崎のまちスタディ・ツアー」の取り組みを紹介し、それを都市貧困とツーリズムに関する諸研究の文脈に位置付けることで、反貧困やエンパワーメントの手段としてのツーリズムの可能性について考察することを目的としている。

従来、都市貧困におけるツーリズムについては、他者の暮らしを「覗き見」するものとして、その倫理的側面から批判がなされてきた。他方で、貧困を生み出す社会的背景についての理解を深める教育的経験やグローバルな政治経済的力学に抗するアクティビズムの可能性に触れ、ツーリズムのもつ積極的な意義について言及した研究も散見される。

しかしこうした単純な二分法では、都市貧困とツーリズムをめぐる多様な現実を捉えることはできず、むしろ「良いか悪いか」の二分法的な分析を乗り越えるような視点が求められている。そして、そのため必要なのは、個別事例のエスノグラフィックな「厚い記述」を蓄積し、それを踏まえて都市貧困におけるツーリズムが抱える共通の課題や可能性について検討すること

* 獨協大学外国語学部交流文化学科准教授

であろう。

以上の点を踏まえ、本論文では「釜ヶ崎のまちスタディ・ツアー」の事例を、都市貧困とツーリズムをめぐる諸研究の文脈に位置づけて、その可能性と現状について考察を行う。より具体的には、反貧困という社会変革のための資源を生み出すツーリズムの可能性や、他者化に抗して〈地続き〉の存在として釜ヶ崎を見る新たなまなざしが立ち現れてくる過程を明らかにする。

Abstract

Recently, tourism in urban poverty has been received increasing attention in academics. Although 'slum tourism' has met with strong criticism as voyeurism and commodification of poverty, some empirical studies have mentioned political features and potentials of tourism for anti-poverty activism. Others shed light on learning experience of urban poverty tourism and argue the role of tourism to represent 'reality' to counter the fictional negative images that dominate representations of slums. However, urban poverty tourism is diversified in social and cultural context, and therefore ethnographic empirical studies in local settings are needed to understand dynamics of this new trend.

This paper intends to apply these arguments and examines a case study of urban poverty tourism in Kamagasaki, Osaka. Kamagasaki is known to have the largest day laborer concentration in Japan, and is in a slum-like condition. Therefore, the mass media such as newspapers and popular magazines has frequently portrayed Kamagasaki and its dwellers as 'dangerous', 'criminal' and 'dirt', (re)producing negative stereotyped images of them. Against these 'false' images of a slum, the Kamagasaki Community Regeneration forum, a network organization of academics, activists and local people supporting this area's anti-poverty movement, has been conducting a study tour there since 2004. Some local residents with long experience of day laborers have also been

involved in this tour program as local guides.

In this paper, I examine how these tour experiences enable tourists to transform and deconstruct the essentialized and negative images of this area. Furthermore, it will be argued that these transformative processes enable tourists to view the residents as less 'Othered', but more 'Same-d'.

キーワード：他者化、共感、都市貧困、ツーリズム、釜ヶ崎

Key words : othering, same-d, urban poverty, tourism, Kamagasaki (Osaka)

はじめに

本論文は、日本最大の寄せ場として知られる大阪・釜ヶ崎で行われている「釜ヶ崎のまちスタディ・ツアー」の取り組みを紹介し、それを都市貧困とツーリズムに関する諸研究の文脈に位置付けることで、反貧困やエンパワメントの手段としてのツーリズムの可能性について考察することを目的としている。

英語圏を中心とする観光研究のなかでは、貧困や差別等の社会的困難を抱える都市下層社会におけるツーリズムを「スラム・ツーリズム」と呼び、その現状や課題について包括的な理解を試みる研究が行われてきた。特に2000年代以降、「スラム・ツーリズム」に関する特集を組んだジャーナルや書籍が相次いで発表され、様々な事例の実証的研究が進められてきた¹⁾。

ただし、「スラム・ツーリズム」と総称されるツーリズムの理念や形態は多岐に渡っている。たとえば、スタディ・ツアーやリアリティ・ツアーなど教育的意義に主眼を置いたツーリズムの他 (e.g. Dyson 2012)、反貧困のための地域開発を意図したプロプアー・ツーリズム (e.g. 内藤 2011)、さらには大衆化された物見遊山のツアー (e.g. Steinbrink 2012: 215-216) など多様な観光実践を含意するものである。したがって、様々な理念や形態を含む観光形

態を「スラム・ツーリズム」という単一の呼称で呼んで良いのかという問題がある。また、こうした事業に関わる人々は、「スラム」という言説が喚起する否定的・差別的なイメージを忌避し、「スラム・ツーリズム」という用語を使用しない傾向もある。

以上の点を踏まえると、分析用語として「スラム・ツーリズム」という語を使用すること自体が問題含みであるかもしれない。そのため本文では、よりニュートラルな「都市貧困におけるツーリズム (urban poverty tourism)」(cf. Steinbrink 2012) という語を採用したい。その上で、貧困や社会差別などの困難を抱える地域のツーリズムを包括的に捉え、そこから見えてくる共通の課題や可能性などについて考えてみたい。

従来、都市貧困におけるツーリズムについては、他者の暮らしを「覗き見 (voyeurism)」するものとして、その倫理的側面からの批判がなされてきた (Basu 2012: 69, Frenzel 2012: 50, Frenzel and Koens 2012: 196)。他方で、ツアーを運営する側などは、貧困を生み出す社会的背景についての理解を深める教育的経験やグローバルな政治経済的力学に抗するアクティビズムの可能性に触れ、ツーリズムのもつ積極的な意義について言及してきた (Basu 2012: 71)。

しかし、ダイソンが論じているように、こうした単純な二分法では、世界の様々な地域で行われている都市貧困とツーリズムをめぐる多様な現実を捉えることはできず、「良いか悪いか」の二分法的な分析を乗り越えるような視点が求められているといえる (Dyson 2012: 255)。そして、そのためまず必要なのは、個別事例のエスノグラフィックな「厚い記述」を蓄積し、それを踏まえて都市下層におけるツーリズムが抱える共通の課題や可能性について検討すること、つまりギアーツの言葉を借りれば「事例を通じた一般化」(Greertz 1973) を遂行していくことであろう (cf. Basu 2012: 69)。

以上の点を踏まえ、本論文では「釜ヶ崎のまちスタディ・ツアー」の事例を、都市貧困とツーリズムをめぐる諸研究の文脈に位置づけて、その可能性

と現状について考察を行う。そのために、まず次章では、都市貧困におけるツーリズムがどのように展開してきたのか、その歴史的展開についてまとめた上で、既存研究のなかで提示されてきた主要な論点について整理を行いたい。

1. 都市貧困とツーリズム

(1) 都市貧困へのまなざし

都市貧困におけるツーリズムの歴史を整理したステインブリックによれば、それが最初に生まれたのは19世紀のロンドンである(Steinbrink 2012: 218-225)。この時期、産業革命が進行するなかで、農村から流入してきた貧困層が集住する地域がロンドン市内に形成されていく。特に、イーストエンドは、ロンドン市内最大の貧困層の集住地域として知られ、「混沌 (chaotic)」、「粗野 (uncivilized)」、「恐怖 (horrifying)」などといった「アナザー・ワールド」としてのイメージが形成されていく(Steinbrink 2012:219-220)。植民地主義的想像力のなかで「暗黒」と語られていたアフリカ大陸となぞらえ、イーストエンドをイングランドの「暗黒」地域と語られることもあったという(Steinbrink 2012: 218-225)。

当初、こうしたロンドン市内の貧困地域を訪れるのは、貧困状況を改善するための諸活動を行う聖職者やボランティアか、取材を行うジャーナリストに限られていた。しかし、徐々にロンドン市内の中産階級の人々を中心に、こうした社会運動に携わらない一般の人々も訪れるようになっていったという。こうして、1850年頃には、ロンドンの富裕層がイーストエンドを訪ねることを意味する「スラミング (slumming)」や「スラマー (slummers)」といった言葉が広まっていく(Steinbrink 2012:220)。

この時代、植民地の人々の社会や文化が「未開」や「野蛮」といった否定的なイメージで語られる一方で、エキゾティシズムの対象として消費の対象

としても位置付けられていったように、イーストエンドは、ロンドンの富裕層にとって「不道徳な他者 (immoral Other)」として、中産階級的なモラル(勤勉、清貧、禁欲)から解放される場所であると同時に、前近代的な「共同体」や「温情」が残る場所として「観光のまなざし」(Urry and Larsen 2011 加太訳 2014)が投げかけられるようになったのである。言い換えれば、都市下層の人々の生活がロマン化される、「貧困の文化化 (culturalization of poverty)」(Steinbrink 2012: 229)ともいうべき状況が進行していくのである。

さらに19世紀後半には、米国のニューヨークやシカゴ、サンフランシスコ等の大都市でも同様のツーリズムが発展していく。ただし、白人中間層が同じ白人貧困層の集住地区を訪れていたロンドンの事例とは異なり、米国では白人(アングロサクソン系)中間層が、東欧や南欧、アジア系移民の集住地区を訪ねる、エスニック・スラミング (ethnic slumming) という形態が米国では主流になっていく (Steinbrink 2012: 224-226)。

(2) 第三世界の都市貧困と観光のまなざし

このように都市貧困におけるツーリズムは当初、「北」側の欧米諸国内の都市貧困が観光消費の対象として再発見されることで生まれたものであった。それに対し、第二次世界大戦後には、「南のスラム・ツーリズム (slumming in the Global South)」とも呼びうる新たな形態が生まれていく (Steinbrink, Frenzel and Koens 2012: 4-8)。つまり、「北」の先進諸国のツーリストが、「南」の第三世界の都市下層社会を訪ねるようなツーリズムが展開していくのである。

こうしたツーリズムが最初に生まれたのは、アパルトヘイト下の南アフリカであった。特に反アパルトヘイト闘争に共鳴する海外のアクティビストらの間で、黒人居住区 (township) を訪れるツーリズムが発展していったのである (Frenzel 2012:50-52, Steinbrink 2012: 216)。ただし、現在では当初有していた社会運動としての側面は希薄化し、大衆化が進んでいる。たとえば、

ケープタウン市内には50のツアーオペレーター、年間30万人以上の観光客がツアーに参加し、もはや南アフリカの代表的な観光アトラクションの1つとなっている(Steinbrink 2012:216)。また、反アパルトヘイト闘争で重要な役割を果たしたネルソン・マンデラ氏やデズモンド・ムピロ・ツツ氏の生家を訪ねるような、遺産観光としての特徴も加わっている(Frenzel 2012: 51)

その後、ブラジル・リオデジャネイロのファベラにおいても同様のツーリズムが生まれていく。その契機となったのは、1992年に同地で開催された地球サミットである(Frenzel 2012)。リオデジャネイロで開かれた地球サミットに参加した、NGOや研究者、ジャーナリストなどがファベラを訪れ、その状況をレポートしたことから、ファベラに対する可視性が高まり、NGO関係者や学生などが訪れるようになり、ツアーを斡旋する組織が生まれていく。さらにファベラを舞台にした映画『黒いオルフェ』『シティオブゴッド』などによって、観光のまなざしが醸成され、現在では年間48万人を超える観光客がファベラを訪れるほど、大衆化が進んでいる(Frenzel 2012: 52-54, Frenzel and Koens 2012: 197)。

さらに2000年代に入ると、世界のNGOやアクティビストが集まる世界社会フォーラムを景気として、ナイロビやムンバイにおいても同様のツーリズムが活発化していき(Frenzel 2012: 54-55)。

(3) 社会運動から消費の対象へ

以上、都市貧困におけるツーリズムの歴史的展開について整理をしてきたが、そのプロセスにはある程度の共通点を確認することができる。まず、その源流として、フレンゼルの言うポリティカル・ツーリスト(political tourist)やジャスティス・ツーリスト(justice tourist)、つまりアクティビストの存在が見て取れる(Frenzel 2012)。反アパルトヘイト闘争や、人権や反貧困などの社会変革を志向する人々が貧困地域を訪れ、その現状がメディア等を通

じて発信されていく。しかし、そのことは当該地域の可視性が高めることにつながる反面、都市下層民の生活文化がロマン化されることで、観光消費の対象として再発見されていくことにもなったのである。

こうした社会運動から大衆化したツーリズムへという変化を、ステインブリックは「貧困の文化化 (culturalization of poverty)」という言葉で説明している (Steinbrink 2012:229)。彼によれば、「貧困の文化化」とは、貧困が経済的格差から文化的な差異へと翻訳され、消費の対象になっていくプロセスのことであり、いわば都市貧困に対する観光のまなざしを生む要因ともいえる。19世紀ロンドンのイーストエンドが「中産階級的な規範からの解放を生む魅惑的な場所」として、そして途上国の都市下層の生活文化が「途上国のオーセンティックな舞台裏」として、都市貧困が魅惑的な場所として位置付けられていくのである。

そして、こうした文化化の帰結として、フレンゼルは以下の2点を挙げている。1つは、アクティビズムの後景化と貧困の商品化である。当初存在していた社会変革への志向性は薄れ、貧困は観光客のエキゾティシズムを満足させる商品となってしまう。そして2点目に挙げているのが、自己・他者間の固定化という問題である。つまり、「道徳(moral)／不道徳(immoral)」、「近代／前近代」、「先進国／途上国」といったような、オリエンタリズム的な二項対立が構成され、地続きの存在として他者を捉えるような視点が失われていくのである (Frenzel 2012)。

以上の点を踏まえると、「貧困の文化化」という問題含みの状況にいかに対抗するのかという点が、都市貧困とツーリズムをめぐる研究の重要な論点として浮かびあがってくる (Frenzel 2012, Steinbrink 2012)。言い換えれば、当初含意されていたアクティビズムとしてツーリズムを再定位することは、いかにして可能なのかという問題意識である。本論文では、こうした点について考察を行うべく、以下の2つの問いを設定したい。

まず、「貧困の文化化」というような状況に抗して、いかに反貧困という

社会運動やエンパワーメントの手段としてツーリズムを活用（復活）しうるかという問いである（cf. Steinbrink 2012）。つまり、単なる消費の対象として貧困地域の文化を商品化するのではなく、反貧困という社会変革のための資源を生み出す可能性について考えるということである。

また、フレンゼルは、都市貧困におけるツーリズムが構造的に抱える他者化という問題を乗り越える可能性として、ツーリストがホスト社会の人々を様々な不平等を生んでいるグローバルな経済秩序を生きる「同じ」存在としてまなざす（same-d）可能性について論じている。そして、そのような実践こそが、ツーリストと都市下層住民の連帯を生み、グローバリズムに抗する様々なネットワークを作ることが可能になるとしている（Frenzel 2012: 62）。このフレンゼルの指摘を踏まえた上で、本論文では、都市貧困におけるツーリズムに内在する自己／他者間の固定化・切断という問題を乗り越えることはいかにして可能なのか、言い換えれば、ツーリズムを通じて自他関係の混融という「共感」の地平が立ち現れる可能性について考察を試みる。以上が2つめの問いである。

本論文では、以上の2つの論点を踏まえながら、「釜ヶ崎のまちスタディ・ツアー」の事例について考察をする。筆者はこれまで、2011年9月、2013年3月、2014年3月、2015年3月、2016年3月の4度にわたって勤務先のゼミの学生たちとこのツアーに参加している。さらに、補足的調査として、2015年5月にスタディ・ツアーの運営の中心的存在でもある、釜ヶ崎のまち再生フォーラム事務局長のありむら潜氏にインタビューを行なった。本論文では、筆者が過去に参加したスタディ・ツアーやありむら氏へのインタビューによって得られたデータと、ツアー参加後の学生たちのディスカッションやエッセイ形式の報告書の記述などをもとに考察を行ないたい²⁾。

2. 釜ヶ崎の概要

釜ヶ崎のまちスタディ・ツアーの事例を紹介する前に、釜ヶ崎と呼ばれる地域の概要について簡単に整理をしておきたい³⁾。

釜ヶ崎は、大阪市西成区の北東部、新今宮駅南側の簡易宿泊所が立ち並ぶ、広さ1平方キロメートルほどのエリアのことを指す。1922年の町名改正によって、「釜ヶ崎」という地名は変更された後も、このエリアを指す通称として呼ばれ続けてきた(原口 2011a:22)。本章では、寄せ場としての釜ヶ崎がどのように形成され、そしてそれが1990年代以降の経済的不況や労働者の高齢化のなかでどのような変化が生じているのかを整理し、釜ヶ崎のまちスタディ・ツアーの取り組みを理解するための補助線としたい。

(1) 「寄せ場」としての釜ヶ崎の形成

明治以前の釜ヶ崎は、一面に水田が広がる田園地帯であった。それが都市下層の人々の生活拠点になる契機となったのは、明治以降に始動する近代化に伴う都市空間の再編である。もともと、釜ヶ崎の北側にあった長町(現在の日本橋界隈)に立地していた木賃宿街が、都市の近代化のプロセスのなかで解体され、その木賃宿街が釜ヶ崎に移転してきたのである。それ以来、釜ヶ崎は「スラム」や「ドヤ街」といった否定的な言説によって捉えられるようになっていく(原口 2011a:19-23、原口 2016: 22-23)。

しかし、日雇い労働者や手配師と呼ばれる求人業者が集まり、労働力が取引される「寄せ場」⁴⁾として釜ヶ崎が急速に発展していくのは、戦後のことである。炭鉱の閉山や造船不況などにより仕事を失った地方の労働者が大都市に流入し、その受け皿として釜ヶ崎が肥大化してくのである(原口 2016: 22)。特に大阪では、1970年の万国博覧会を控えていたため、建設業の労働力需要が急増しており、建設業に携わる日雇い労働者が集まる街へとなっていった(平川 2011:128)。

(2) 寄せ場の変容

しかし、1990年代以降、バブルの崩壊と長引く不況により、労働力需要が激減していくなかで、失業者が野宿生活を強いられ、社会問題化していく。そして、こうした問題に直面するなかで、今日でも行われている夜回りや炊き出し、生活保護申請の支援など、野宿者支援の取り組みが急成長していく（平川 2011:131）。

さらに、2000年代以降は労働者の高齢化の問題も深刻化していき、生活保護受給者が急増していく。そして、こうした元日雇い労働者の人々の住まいとして「福祉マンション」や「福祉アパート」などと呼ばれる簡易宿泊所を共同住宅に転用した施設が増え、失業した労働者の住まいの問題は大幅に改善されていく（平川 2011: 132）。しかし、住まいの問題が解決した一方で、今度はアパート生活での孤独・孤立などの問題が深刻化し、この問題を乗り越えるために後述する「サポーターズ・ハウス」（稲田 2011）や、アートを通じた社会的包摂を目指すNPO ココロームの諸活動（上田 2016）、近隣の公園で野菜作りをするなどの活動を行う「ひと花プロジェクト」⁵⁾ など、孤立化を防ぐための新しい取り組みが生まれていく。

後述するように、釜ヶ崎のまちスタディ・ツアーを主催する「釜ヶ崎のまち再生フォーラム」も、以上のような状況のなかで、ありうべき「まちづくり」を模索するネットワークとして組織化されていった。すなわち、釜ヶ崎のまちスタディ・ツアーは、「日雇い労働者の街」から「野宿者の街」へ、そして「生活保護の街」へと急速に変容していくなかで生じている様々な問題を打開するアクティビズムという文脈で生まれたものとして考えることができる。そこで次章では、釜ヶ崎のまちスタディ・ツアーの詳細について記述していく。

3. 釜ヶ崎のまちスタディ・ツアー

釜ヶ崎のまちスタディ・ツアーを主催しているのは、1999年に発足した「釜ヶ崎のまち再生フォーラム（以下、フォーラム）」である。フォーラムが発足された当時、釜ヶ崎では、構造的不況による野宿者の増加や日雇い労働者の高齢化などの問題が深刻化していた。こうした状況に対して、釜ヶ崎で様々な活動を行ってきた個人や団体がゆるやかにつながって結成されたのが、フォーラムである。

現在、フォーラムが主催しているスタディ・ツアーは、個別の問い合わせに応じてフォーラムのスタッフが随時実施していた無料のスタディ・ツアーを、2004年に収益事業化したものである。2016年11月現在、ツアー参加費は、学生等が1人当たり2,000円、一般が3,000円、報道関係者・専門家向けのツアーの場合は5,000円となっている。

このツアーの特徴の1つは、釜ヶ崎で様々な活動を行ってきたフォーラムのスタッフと、元日雇い労働者（「おっちゃん」⁶⁾）が当事者の視点から釜ヶ崎の町について語るという点である。それゆえ、同ツアーに実践者としても関わってきた松村らは、このツアーをコミュニティ・ツーリズムと位置づけている（松村他2011）。

以下、スタディ・ツアーの基本的な流れについて説明をしておきたい。

(1) 事前レクチャー

ツアー参加者は、まず案内役のフォーラム・スタッフから大阪市立大学西成プラザにて30分程度の事前レクチャーを受ける。そこでは、釜ヶ崎の歴史や基本的データの紹介の他、2000年代以降様々な支援団体が協働で行なっているまちづくりの現状について説明がなされる⁷⁾。

しかし、フォーラムの事務局長を務め、スタディ・ツアー運営の中心的役割を担っているありむら潜氏は次のように述べる。

いろいろな学びの対象として釜ヶ崎はありますけれども、限られた時間のなかで何を見ていくかということ、やっぱり基本はどうしても、1人1人の日雇労働者、あるいは今生活保護になっている人たちの暮らしがどういうものなのかってことです。そういう人たちが密集して住んでいる、この地域独特のコミュニティとか文化とか、そういったものをとにかく体感してもらうこと。これが基本ですね（2015年3月23日のツアー時の解説より）。

したがって、事前レクチャーに続く実際のまち歩きでは、こうした釜ヶ崎の「文化」の紹介に重点が置かれる。以下では、そのポイントを簡単に整理しておきたい。なお、ここで述べるツアーの内容は、主としてありむら氏が案内役となった場合のものである。したがって、特に断りのない限り、案内役の語りや説明はありむら氏によるものである。

(2) まち歩き

① コレクティブ・タウン

通称ドヤと呼ばれる日雇労働者向けの簡易宿泊所は、1畳～4畳ほどと狭い上に、風呂やトイレ、キッチンなどもない場合が多い。こうした簡易宿泊所の狭さゆえに、釜ヶ崎ではメシ屋や銭湯、コインロッカーといったものが集まっている。平川隆啓が述べているように、「住まい」の機能がドヤの内部で完結するのではなく、まち全体にあふれだしているのである（平川2011: 114）。さらには、狭小なドヤであるがゆえに、休日には公園や路上に出て将棋を指すなど、生活の諸機能が外延的にあふれていき、それが釜ヶ崎特有の団らん・交流機能となっていく。このような釜ヶ崎の場所性を、ありむらは「コレクティブ・タウン」（ありむら2012: 126）と呼んでいる。

スタディ・ツアーでは、こうした釜ヶ崎特有のコンテキストのなかで生み出されてきた、様々な「文化」について学ぶ。たとえば、コレクティブ・タウンという視点から釜ヶ崎を見る場合、夏祭り⁸⁾や越冬闘争⁹⁾などのイベン

トも行われ、釜ヶ崎における「政治文化の舞台」(原口 2016: 258)とも称される三角公園¹⁰⁾は象徴的な場所である。そこには、街頭テレビが設置され、常に多く人が集まっている。スタディ・ツアーでは、実際に三角公園を訪れ、たき火をしたり、談笑をしたりといった釜ヶ崎に暮らす人々にとっての「居場所」(湯浅 2008: 137)となっていることを確認する。

② 様々なセーフティ・ネット

釜ヶ崎で生まれた様々な文化は、そこを生活の場とする人々にとってのセーフティ・ネットでもある。実際、釜ヶ崎は様々な問題が集積している一方で、それに抗するセーフティ・ネットを釜ヶ崎の人びと全体で創り出してきたと言われている(ありむら 2012: 153、原口 2011:235-255、上田 2013: 54)。スタディ・ツアーでは、こうした釜ヶ崎で生まれた多種多様なセーフティ・ネットについて学ぶことも特徴の1つとなっている。

釜ヶ崎で見られるセーフティ・ネットは、三角公園内で行なわれる炊き出しをはじめ、野宿者向けの夜間シェルターや日雇労働者向けの失業保険制度である日雇雇用保険手帳(「白手帳」)、一定の手続きをすれば無料で医療が受けられる病院(大阪社会医療センター附属病院)など多岐に渡っている。ツアーでは、こうした現場を見学しながら、釜ヶ崎におけるユニークな資源や制度について学んでいく。

釜ヶ崎の多種多様なセーフティ・ネットのなかで、特にツアー中、時間を割いて説明されるのがサポーターティブ・ハウスである。

サポーターティブ・ハウスとは、簡易宿泊所を転用した生活保護受給者向けの共同住宅のことを指す(稲田 2011: 330-331)。一般にサポーターティブ・ハウスでは、スタッフが常駐し様々な生活支援を行なっている。たとえば、日雇い労働者として長年生きてきた人々にとって、月単位でのお金の管理は困難な場合がある。月額固定給でやりくりするというハビトゥスを必ずしも共有していないからだ。そのため、サポーターティブ・ハウスでは月ごとに決まった

額で生活のやりくりをするための助言等も行なっている。また、サポーターティブ・ハウス内に共有スペースを設けるなど、孤立化を避けるための様々な取り組みも行なっている。生活保護受給者が抱える問題の1つに、人間関係の「溜め」(湯浅 2008)を失った孤立化という問題がある。こうした問題を解決するために、サポーターティブ・ハウスでは共有スペースを設けて、居住者間の交流を促したり、地域子どもたちとの交流イベントを行うなど、孤立化に抗する様々な取り組みが行なわれている。

スタディ・ツアーでは、サポーターティブ・ハウスの草分け的存在として知られる「おはな」を訪れ、サポーターティブ・ハウスの現状について、オーナーから話を伺うのが定番となっている。

③「おっちゃん」たちとの懇談

以上のようなまち歩きを終えると、事前レクチャーを受けた大阪市立大学西成プラザに戻って、質疑応答や懇談を行なう。ツアー後の懇談で特に重視されているのが、案内役を務めた元日雇労働者の「おっちゃん」たちとの対話である。ツアー中は、どうしてもフォーラムのスタッフが解説することが多くなりがちで、日雇い労働に従事してきた当事者の視点から釜ヶ崎での様々な経験を聞く機会は限られている。そこで、最後の懇談では、釜ヶ崎を拠点に日雇い労働者として生きてきた人々のライフストーリーや釜ヶ崎での暮らしなど、彼ら自身の視点から釜ヶ崎について語られる。

たとえば橋梁鳶として長年働いてきたA氏は、橋梁鳶という仕事への誇りやこだわりを熱心に語ってくれる。昔、地方に橋を架ける仕事に行くと、しばしば地元で歓迎されたこと。工事現場に皆が集まってきて仕事ぶりを見るので、「かっこいい」職人技を見せつて拍手喝采をあげたこと。あるいは、橋梁鳶としてのこだわりがあり、作業着は最も高価な東京・三ノ輪のブランドのものを身につけていたこと。今でも、建設に携わったレインボー・ブリッジをテレビで見ると様々な思いがよみがえってくること。こうした、職人と

して長年生きてきた自負やそこから生まれる自己肯定感のようなものが語られる。

また、この懇談では元日雇い労働者の人々が、釜ヶ崎独特の「文化」を肯定的に語る場面もしばしば見られる。たとえば、原発労働者や建設労働者として各地を転々としてきたC氏は、釜ヶ崎に流れ着いた日にシケモク（タバコの吸い殻）を拾っていたら、見ず知らずの人が肩をたたいて、何も言わずに1,000円くれたというエピソードを話し、「酒飲んで喧嘩したりしている人たちもいてはるみたいですけど、僕はこの町はええ町やと思います」と語る。

以上のように、ツアー後の懇談の場では、日雇い労働に従事してきた人々のライフストーリーや釜ヶ崎の暮らしが詳細に語られる。従来、釜ヶ崎をはじめとする寄せ場では、様々な理由から地縁・血縁を断って来た人が多いゆえに、互いに「過去を聞かない」ということが規範とされてきた（西澤 1995: 106-113）。それに対して、懇談の場における「おっちゃん」たちの饒舌な語りは、こうした規範に逸脱するかのようにもみえる。この点について、ありむら氏は次のように説明する。

このまちで自分の人生のことは語らない、聞かない。それはタブーってことに一応なっているんですね。表面上はなっているのです。実際そうでもあるのだけど、でもよく話をする関係になってくると、話したい事はいっぱいあるんですよ。失敗も含めてね。（中略）自身を語れる、聞いてくれる人たちとの出会い、自分を語ることによって自分自身をもう一度見直すことで、自分自身もまたちょっとずつ変わっていく。色んなプラスの効果があるんですね（2015年3月23日のツアー時の解説より）。

このように自身の経験を語ることは、「おっちゃん」たちにとっても様々な意味をもっていることが分かる。この点については次章で改めて考察することにした。

4. 考察

以上を踏まえた上で本章では、冒頭で提示した2つの問いについて考察を行っていききたい。すなわち、①「貧困の文化化」というような状況に抗して、いかに反貧困という社会運動やエンパワーメントの手段としてツーリズムを活用（復活）しうるか、②そして「都市貧困におけるツーリズム」に内在する自己／他者間の固定化・切断という問題を乗り越えることはいかにして可能なのか、という問いに対して、釜ヶ崎の事例を踏まえた考察を行う。

まず次節では、参加者の釜ヶ崎に対するまなざしが、スタディ・ツアーへの参加を通じていかに変容していったのかという点に着目し、ツアー参加前に支配的であった自己・他者間の固定化されたまなざしが次第に融解していく側面を明らかにする。そして続く節では、スタディ・ツアーに関わる「おっちゃん」たちにとって、ツアーの経験はいかなる意味を持ち得るのかという点について、反貧困という視点から考え、エンパワーメントの手段としてツーリズムが持ち得る可能性について考えてみたい。

(1) 反ダーク・ツーリズム

インターネットやマスメディアでは、釜ヶ崎を「暴動の町」「貧困の町」「犯罪の町」などネガティブなイメージで語られることが多かった。こうしたことが影響しているのか、スタディ・ツアーに参加する学生の多くは当初、釜ヶ崎に対して肯定的なイメージを持っている人はほとんどいない。また、様々な問題が集積している場所＝「支援の対象」として、釜ヶ崎を見る学生も多い。いずれにせよ、スタディ・ツアー参加前は、釜ヶ崎という場所を、自分の生活世界（ホーム）とは異質な場所として捉えるようなまなざしが支配的である。

それに対して、スタディ・ツアー参加をきっかけに、事前に抱いていた

釜ヶ崎に対するネガティブなイメージが払拭されていくという傾向がみられる。以下は、参加学生がツアー後に執筆したエッセイの抜粋である¹¹⁾。

- ・釜ヶ崎を訪れて一番に感じたことは、世間一般に蔓延するイメージとは違った、居心地の良さやどこか懐かしさのある郷愁だった。
- ・実際に釜ヶ崎に行ってみて、釜ヶ崎=怖い町というわけではないことが分かった。もちろんまだ解決しなければいけない問題はたくさんある街だけど、見えないエネルギーや生きる力に溢れた街という印象を受けた。
- ・実際に釜ヶ崎を訪れて思ったことは、みんな私たちと同じようにそれぞれに個性があるというシンプルで当たり前のことであった。(中略)釜ヶ崎の人びとを1人の人間として捉えだしたとき、それまで見えてこなかった個性が見えてくる。たしかに私たちに敵意をもったまなざしで見えてくる人や、「おい、出て行け」と言ってくる人もいて、目を背けたくなる部分もあった。釜ヶ崎は決して綺麗事では語れない。
- ・しかし、釜ヶ崎の「おっちゃん」たちは、不器用であるながらも、人を思いやることや、仕事に誇りを持つという、人間らしい、生き生きとした側面をたくさん持っていた。

こうした語りからも分かる通り、スタディ・ツアーの経験は、参加者の釜ヶ崎に対する否定的なまなざしに変容していく契機となっている。つまり、当初「ダーク」な場所というイメージが支配的であったが、スタディ・ツアーへの参加を通じてこうしたイメージが融解し、地続きの場所として釜ヶ崎を捉えなおすようになっていくのである。

インドのムンバイの「都市貧困におけるツーリズム」について論じたダイソンは、ツアー参加を契機にツーリストの「都市貧困」についての誤ったイメージが払拭され、そこに生きる人々に対して親縁性を抱くようになっていく点を明らかにしている(Dyson 2012:261-262)。釜ヶ崎においても、ダイソ

ンが描くムンバイの事例と同様の傾向が、見て取ることができる。

その意味で、釜ヶ崎のスタディ・ツアーは、ダーク・ツーリズムというよりも、むしろ反ダーク・ツーリズムという特徴を強くもっているといえる。この点を踏まえると、貧困地域で行われているツーリズムの取り組みを「ダーク・ツーリズム」(cf. 古賀 2016)と呼ぶことの是非を改めて問い直す必要があるであろう。「ダーク」というイメージを刻印され続けてきた釜ヶ崎の人々が、そのイメージに抗して「まちづくり」の一環としてスタディ・ツアーの取り組みを行っている時、その取り組みを「ダーク・ツーリズム」と呼ぶことは、現実を無視した認識であるばかりでなく、そこに関わる人々のエンパワーメントの可能性すらも奪い取ってしまう危険性があるということに自覚的であるべきであろう。

(2) 「溜め」を作り出すこと

スタディ・ツアーの事前学習で配布される資料に、ありむら氏の漫画のキャラクター「カマヤん」が「西成をすばらしいふるさとにしようよ」「新しいふるさとづくりや」と述べている箇所がある。これは、ありむら氏が現在関わっている釜ヶ崎のまちづくりの目標を象徴的に表している言葉である。

釜ヶ崎に集まる労働者たちは、様々な理由で地縁や血縁を断ってきた人々が多く、さらには日雇い労働者という性格上、釜ヶ崎という地に根づく人々は多くはなかった。いわば、「流れ者意識」が強い人々の集まりであったといえる。しかし、こうした高度経済成長時代を底辺で支えてきた人々の間では、高齢化に伴う生活保護受給が急増している。こうした現状のなかで、「この街で死ぬんや」「ここが故郷や」といった意識が一部の人々の間で芽生え始めているという。そして、こうした「おっちゃん」たちの意識変化に呼応する形で、日雇い労働者として生きてきた人びとが地域に根つき直そうとするための様々な取り組みが、近年盛んに行なわれている。前述した「ひと花

プロジェクト」や、釜ヶ崎の野宿経験者らによって構成される紙芝居グループ「むすび」¹²⁾などはその一例である。これらの活動は、野菜作りや紙芝居という協働作業を通じて、社会的なつながりを作り出すと同時に、仕事に代わる何かを得ることで自己の生を肯定的に捉え直していくという試みである。

反貧困活動に長年従事して来た湯浅誠は、貧困に抗うためには、当事者の居場所作りや相互交流が重要な意味を持つことを指摘している(湯浅 2008: 136-138)。こうした活動の積み重ねが、いざというときに頼れる友人がいるという人間関係の「溜め」を生み、さらには自分に自信がある、自分を大切にできるといった精神的な「溜め」をも生むからである。紙芝居むすびやひと花プロジェクトの活動は、様々な「溜め」を作り出す反貧困のための創造的実践といえる。

そして釜ヶ崎のまちスタディ・ツアーもまた、このような文脈で考えることができる。まず、スタディ・ツアー運営に携わり、それによっていくばくかの現金収入を得るということは、中間就労を通じた自尊心の回復といった側面をもっている。また、前述のようにスタディ・ツアーでガイド役を務める「おっちゃん」たちは、「過去に触れない」という規範が存在するなかで、そうした規範から逸脱するかのように自己の生について饒舌に語る。そしてその饒舌な語りが生まれるのは、その語りに真摯に耳を傾ける若者の存在があるからであり、そこに新たな人間関係が生まれる。それゆえ、スタディ・ツアーで自らの生を語るという行為は、「おっちゃん」たちにとって精神的な「溜め」を作り出す積極的な機会となり得ているといえる。松村らが論じているように、このツアーは自らの釜ヶ崎での暮らしを他者に伝えることを通じて、自信と誇りを回復するエンパワーメントの場となっているのである(松村他 2011)。

そして、日本社会の中で様々な「溜め」が失われていっているという実感は、しばしば「サバイバル」「競争」といったレトリックで語られる就職活

動に直面せざるを得ない学生の多くは共有している。そのような状況にあるからこそ、釜ヶ崎における「溜め」を作りだす諸実践に触れるスタディ・ツアーの経験は、自らの生を再帰的に捉え直す積極的な契機ともなりうる。そしてこのような反省的な思考は、釜ヶ崎を異質化・他者化するのではなく、ネオリベラリズムという時代状況を共に生き、いかに「溜め」を取り戻すのかを模索する〈地続きの〉存在として「おっちゃん」たちを捉え直していくことにつながっていく。

おわりに

釜ヶ崎の寄せ場の記憶を掘り起こし、日雇い労働者たちのエージェンシーを克明に描き出した『叫びの都市』（原口 2016）のなかで、原口剛は以下のように述べている。

私たちはすでに、釜ヶ崎的状况を生きている。寄せ場の記憶をたどることは、単なるノスタルジアではない。過去は、私がどのような状況を生きているのかを測り直し、生き残る術を手練り寄せるために、かろうじて手元に残された手がかりなのだ（原口 2016:345）。

今日、我々は雇用や生活の不安定性は社会全体に拡大された「社会の総寄せ場化」（原口 2016）ともいうべき状況のなかにいる。しかし、情報技術の進展のなかで、寄せ場は携帯電話に、ドヤはネットカフェやビデオ試写室等にとって代わることで、人々は徹底的に個人化されている（原口 2016:346-356）。それゆえ、現代の労働者には寄せ場のような「共同性」は存在し得ない。しかし、こうした状況の中で、今一度釜ヶ崎が生み出した様々な「文化」や抵抗実践を見つめ直すことは、ネオリベラルな現代社会の問題点を明らかにするとともに、それにいかなる方法で抗うのかについて豊かな示唆を与え

てくれるであろう (cf. 関根 2008)。

たしかに、釜ヶ崎は 1990 年代以降、「日雇い労働者の街」から「野宿者の街」、そして「生活保護の街」へとその性格が変容してきた (生田 2016: 24)。しかし、それは釜ヶ崎の人々が作り上げていた様々な「文化」が消え去ってしまったことを意味しない。生田武志が述べるように、釜ヶ崎は労働、差別、貧困等の日本社会が抱える様々な矛盾が集中する「矛盾の縮図」であるが、そうであるからこそ逆に困窮した人々を救う「社会資源」が最も集中する場所であり、様々な人とのつながりや自由が存在する「可能性の縮図」でもある (生田 2016:331)。それゆえ、釜ヶ崎の現実に目を向けることは、日本社会が抱える様々な矛盾を注視することであると同時に、それをいかなる方向に改変すべきかを考える契機ともなりうるのである。

本論文で紹介したスタディ・ツアーが持っている意義と可能性もそこにあると考えられる。スタディ・ツアーを通じて、釜ヶ崎で生まれた様々なセーフティ・ネットや「文化」を真摯に学ぶことは、現代日本が抱える様々な問題を改めて再確認すると同時に、それへの抵抗の可能性について考察する機会ともなりうる。そして、こうした反省的な思考は、ツアー参加者が釜ヶ崎の人々や実践を他者化するのではなく、フレンゼルのいう same-d、つまりホスト社会の人々を様々な不平等を生んでいるグローバルな経済秩序を生きる「同じ」存在としてまなざす視点によって初めて生まれるものであろう。言い換えれば、他者化に抗して自他関係の混融という「共感」のモーメントこそが、現代社会が抱える様々な矛盾とそこからの解放の可能性について考える反省的思考が生み出す。釜ヶ崎のまちスタディ・ツアーとは、以上のようなポテンシャルをもったツーリズムの試みといえよう。

謝辞

釜ヶ崎におけるフィールドワークに際しては、釜ヶ崎のまち再生フォーラムのありむら潜氏と平川隆啓氏に大変お世話になりました。ここに記して、

感謝の意を表します。なお、本論文は、平成 28 年度 獨協大学特別研究助成「ツーリズム・リテラシーの研究と教育における再帰的相関のための共同研究」の成果を一部含みます。

注

- 1) フレンゼルらによって編集された『スラム・ツーリズム』(Frenzel et al eds. 2012) が出版された他、*Tourism Geographies* 誌上でも 2012 年に都市貧困とツーリズムに関する特集が組まれている。
- 2) 釜ヶ崎のまちスタディ・ツアーについては、すでに別のところで論じたことがある(須永 2016)。この事例のより詳細な民族誌的記述については、拙稿(須永 2016)を参照されたい。
- 3) 釜ヶ崎という地名は、1922 年の町名改正によって正式な地名としては姿を消している。そのため、行政機関やマスメディアは、1960 年代の釜ヶ崎対策のなかで作られた「あいりん地域」という呼称を使うのが一般的である。しかし労働者や支援団体の間では、「釜ヶ崎」(あるいは「カマ」「ニシナリ」という呼称が現在でも使われ続けている。「あいりん地域」に地名が変更されたからといって、この地域が抱える様々な問題が解決したわけではなく、行政という上から押し付けられた「あいりん」という呼称はかえって問題から目を背けることにつながりかねないと考える人々も多いためである(原口 2011a:24-30)。以上のような理由から、本論においても「釜ヶ崎」という表記を使用したい。
- 4) 原口によれば、「ドヤ街」とは社会病理学的研究が福祉行政と連携しつつ「上から」付与した概念であるのに対して、「寄せ場」とは労働運動のなかで「下から」生み出された概念であるという(原口 2016:31)。そして、寄せ場集まる労働者の主体性を強調する「寄り場」という呼称を使う場合もある(原口 2016:352)。
- 5) ひと花プロジェクトについては、以下のウェブサイト参照されたい。
<http://www.hitohanap.org/about/> (最終閲覧日: 2016 年 11 月 23 日)
- 6) 釜ヶ崎では、親しみを込めて(元)日雇い労働者の人々を「おっちゃん」と呼び習わすことが多い。
- 7) こうした釜ヶ崎における取り組みの詳細については、釜ヶ崎のまち再生フォーラムの活動にも関わる研究者らが執筆した『釜ヶ崎のすすめ』(原口他編, 2011)が秀逸である。
- 8) 毎年 8 月 13 ~ 15 日にかけて行われる夏祭りでは、様々なアーティストのライブやカラオケ大会、盆踊りなどが行われる他、亡くなった労働者を追悼する慰霊祭なども行われる。原口は、この夏祭りについて「ともに生きる仲間であることを労働者が確認しあう、とても大事な釜ヶ崎の文化であり、セーフティネット」(原口 2011b: 239)で

あると指摘している。

- 9) 越冬闘争とは、年末年始にかけて行われる取り組みで、多数の支援団体やボランティアが集まって、様々な野宿者支援が集中的に行われる。この時期は、求人件数が極端に減る上、寒さも厳しいことから、路上で命を落とす労働者が少なくなく、文字通り野宿者の生を支える非常に重要な取り組みとなっている（原口 2011b: 239）。
- 10) 正式名称は、萩之茶屋南公園。三角形の形状のため、通称三角公園と呼ばれている。
- 11) スタディ・ツアーに参加した学生によるエッセイは、(獨協大学外国語学部・須永和博研究室編, 2013)、および(獨協大学外国語学部・須永和博研究室編, 2014)に所収されている。
- 12) 紙芝居グループ「むすび」については、石橋(2013)の論考が詳しい。

参考文献

- ありむら潜(1987)『釜ヶ崎<ドヤ街>まんが日記』日本機関誌出版センター
 ———(2012)『震災・ガレキを越えて カマヤんの夢畑』明石書店
- Basu, Kanika (2012). Slum tourism: for the poor, by the poor. In F. Frenzel, K. Koens & M. Steinbrink (Eds.), *Slum tourism* (pp.66-81). London: Routledge.
- 獨協大学外国語学部・須永和博研究室編(2013)『<周辺>から逆照射する現代日本の生活世界——釜ヶ崎・生野への旅から見えてきたこと』獨協大学外国語学部・須永和博研究室
 ———(2014)『釜ヶ崎・生野への旅から——2013年度大阪調査合宿成果報告書』獨協大学外国語学部・須永和博研究室
- Dyson, P. (2012). Slum tourism: Representing and interpreting 'reality' in Dharavi, Mumbai. *Tourism Geographies*. 14 (2): 254-274.
- Frenzel, F. (2012). Beyond 'othering': The political roots of slum tourism. In F. Frenzel, K. Koens & M. Steinbrink (Eds.), *Slum tourism* (pp.49-65). London: Routledge.
- Frenzel, F. and Koens K. (2012). Slum tourism: developments in a young field of interdisciplinary tourism research. *Tourism Geographies* 14 (2): 195-212.
- Frenzel, F., Koens K. & M. Steinbrink eds. (2012). *Slum tourism*. London: Routledge.
- Geertz, C. (1973). Interpretation of cultures: selected essays. New York: Basic Books. [吉田禎吾他訳(1987)『文化の解釈学1』岩波書店]
- 原口剛(2011a)「釜ヶ崎という地名」原口剛・稲田七海・白波瀬達也・平川隆啓編『釜ヶ崎のスヌメ』(pp.15-38) 洛北出版
 ———(2011b)「騒乱のまち、釜ヶ崎」原口剛・稲田七海・白波瀬達也・平川隆啓編『釜ヶ崎のスヌメ』(pp.235-255) 洛北出版
 ———(2016)『叫びの都市——寄せ場、釜ヶ崎、流動的下層労働者』洛北出版
- 平川隆啓(2011)「釜ヶ崎のすまい」原口剛・稲田七海・白波瀬達也・平川隆啓編『釜ヶ

- 崎のススメ』(pp. 113-142) 洛北出版
- 生田武志 (2012) 「釜ヶ崎と「西成特区」構想」『現代思想』40 (6): 130-138
- (2016) 『釜ヶ崎から—貧困と野宿の日本』ちくま文庫
- 石橋友美 2013 「高齢者と向き合う実践から——さいごの人間関係・紙芝居むすび」西川勝編『孤独に応答する孤独——釜ヶ崎・アフリカから』(pp.104-123) 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター
- 神田誠司 (2012) 『釜ヶ崎有情』講談社
- 古賀広志 (2016) 「労働と都市を考える」『ダークツーリズム・ジャパン』2: 80-85
- 松村嘉久・ありむら潜・平川隆啓 (2011) 「都市におけるコミュニティ・ツーリズムの実践と可能性——釜ヶ崎のまちスタディ・ツアーを事例として」『日本観光研究学会全国大会論文集』26: 289-292.
- 内藤順子 (2011) 「プロプアー・ツーリズムの可能性—チリにおける「スラム観光」から考える」『交流文化』12: 22-33
- 西澤晃彦 (1995) 『隠蔽された外部——都市下層のエスノグラフィー』彩流社
- 関根康正 (2009) 「「ストリートの人類学」の提唱——ストリートという辺縁で人類学する」関根康正編『ストリートの人類学 上巻』(pp.27-44) 国立民族学博物館
- Steinbrink, M. (2012). 'We did the slum!': Urban poverty tourism in historical perspective. *Tourism Geographies* 14 (2): 213-234.
- Steinbrink, M., Frenzel, F. and Koens, K. (2012). A. Development and globalization of a new trend in tourism. In F. Frenzel, K. Koens & M. Steinbrink (Eds.), *Slum tourism* (pp.1-18). London: Routledge.
- 須永和博 (2016) 「他者化に抗する観光実践——釜ヶ崎のまちスタディ・ツアーを事例として」『観光学評論』4 (1): 57-70
- 上田假奈代 (2013) 「孤独の力——引き合う万有引力のように」西川勝編『孤独に応答する孤独——釜ヶ崎・アフリカから』(pp.50-57) 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター
- 上田假奈代 (2016) 『釜ヶ崎で表現の場をつくる喫茶店、コルルーム』フィルムアート社
- Urry, J. & Larsen, J. (2011). *The tourist gaze (3rd ed.)*, London: Sage Publication.[加太宏邦訳 (2014) 『観光のまなざし【増補改訂版】』法政大学出版局]
- 湯浅誠 (2008) 『反貧困——「すべり台社会」からの脱出』岩波新書

